シーカー 2

A L P H A L I G H T

安部飛翔
Hisyou Abe

アルファライト文庫

主な登場人物
ジルドレイ
クロスメリア王国近衛隊副隊長。53歳。称号:勇者。カタリナのお目付け役。
カタリナ
クロスメリア王国王女。23歳。勇者の称号を持つお転婆姫。近衛隊の隊長も務める。
ドラグゼス
晃竜帝国の竜皇。205歳。本来の姿は300メートルを超える巨大な竜。
エリナ
晃竜帝国の第二皇女。17歳。アッシュとは両想い。
ジュリア
職業神の神殿に仕える神殿騎士。22歳。S級相当の力を持つ実力者。
スレイ
本編の主人公。18歳。シークレットウェポンの双刀を操る最強剣士。二つ名は「黒刃」。
イリナ
晃竜帝国の第一皇女。19歳。過去にスレイと勝負をして引き分けた。
フィーナ
職業神の神殿に仕える巫女。18歳。探索者のクラスアップを担当。
リリア・アルメリア
探索者ギルドの受付嬢。18歳。ギルドのアイドル的存在。

1

毒蛇の巣穴――地下二十一階

邪神シェルノートの分体との戦いから数日が経った。

あの事件は、非常に強力なアンデッドとなったアレスタ教諭によって引き起こされたものとして処理された。解決したのも、とある凄腕の迷宮探索者達とされ、スレイ、アッシュ、ルルナ、エミリアの名が表に出ることはなかった。

スレイには裏の報酬としてシークレットウェポンの双刀が授けられた。それ以外にもスレイとアッシュ達の四人には、事件を引き起こした「強力なアンデッド」討伐の報酬として、探索者ギルドから相応の金額が支払われた。そのおかげで懐具合は今かなり暖かい。

そして現在スレイは、あの後予定通りに長期のパーティ登録を解除した三人と、今度は臨時に短期登録でパーティを組み、中級者用の迷宮『毒蛇の巣穴』へと挑んでいた。

その理由は、上級邪神の一部を宿した分体を倒したことによる急激なレベルアップにある。

スレイはレベルが10上がり24となった。そして、その時点でパーティ登録をしていた残りの三人のレベルも自動的に上がり、アッシュ、ルルナ、エミリア共にレベル25となっていた。

ルルナに至ってはクラスアップの条件も満たした為、職業神の神殿へと赴き、魔闘士へのクラスアップを果たしている。

尤も、やたらと物騒な称号や際立った特性の幾つかは、実際にシェルノートの分体と戦ったスレイだけが入手していた。

各々が自分の能力値を確認する。

スレイ　Lv：24　Age：18

【筋力】B　【体力】B
【魔力】B　【敏捷】SS
【器用】S　【精神】EX
【運勢】G

【称号】不死殺し（アンデッド・キラー）、神殺し（ゴッド・スレイヤー）

【特性】天才、闘気術、魔力操作、闘気と魔力の融合、思考加速、思考分割、剣技上昇、炎の精霊王の加護、炎耐性、邪耐性、神耐性

【祝福】無し

【職業】剣士

【装備】紅刀アスラ、蒼刀マーナ、鋼鉄のロングソード×2、革のジャケット、革のズボン、革の靴

【経験値】2380　次のLvまで20

【預金】10,100コメル

「神殺し（ゴッド・スレイヤー）」とは神を一柱でも倒した者に与えられる称号で、本来なら絶対的に獲得不可能と断言してもよい。

この称号は耐神補正（たいしんほせい）がかかるのみでなく、〝真の神〟が持つ「全知全能」の力に対してすら耐性を持つようになる。邪神の分体を倒したことで邪神討伐に役立つ称号を手にするとは皮肉な巡り合わせだ。

そして特性「神耐性」、邪神の分体との戦いを経（へ）て手に入れたこの特性もまた、他の耐性系特性とは違い、神属性に対する耐性が高くなるのみならず、「全知全能」耐性も含まれている。

つまりスレイは二重に全知全能耐性を持ったことになる。邪神ロドリゲーニ打倒に向け、一歩前進したと言えるだろう。

アッシュ　Lv：25　Age：18

【筋力】B　【体力】B
【魔力】E　【敏捷】C
【器用】C　【精神】C
【運勢】C

【称号】見習いバーサーカー、エルシア学園卒業生

【特性】狂化、戦技上昇、炎耐性

【祝福】戦神アレス

【職業】戦士

【装備】ダマスカスのバルディッシュ、ダマスカスのプレートメイル、重量軽減のアミュレット

【経験値】2479　次のLvまで21

【預金】104,000コメル

ルルナ　Lv：25　Age：18

【筋力】B　【体力】B
【魔力】D　【敏捷】B
【器用】C　【精神】C
【運勢】D

【称号】纏う者、エルシア学園卒業生

【特性】闘気術、魔闘術、格闘技上昇、炎耐性

【祝福】闘神バルス

【職業】魔闘士

【装備】ダマスカスのガントレット、ダマスカスのブレストプレート、絹の服、絹のズボン、革の靴

【経験値】2470　次のLvまで30

【預金】14,820コメル

「纏(まと)う者」とは特性「魔闘術」を身につけた者に与えられる称号である。魔闘術は肉体と武具の内部を闘気で強化し、外部を物質化した魔力で覆うことで強化するものだ。闘気による直接強化と魔力による世界法則の書き換えという二重強化により、＋2ランクの能力値と武具の強化が可能な闘士系職業専用特性となっている。

エミリア　Lv：25　Age：18

【筋力】D　【体力】D
【魔力】A　【敏捷】D
【器用】C　【精神】B
【運勢】C

【称号】森エルフ、エルシア学園卒業生

【特性】思考加速、思考分割、魔法上昇、精霊の祝福、炎耐性

【祝福】森神ルディア

【職業】魔術師

【装備】祝福の杖、エルフのローブ、エルフの靴

【経験値】2450　次のLvまで50

【預金】15,310コメル

スレイに至ってはランクもA級相当へと上がっていた。

しかしここで心配となるのは、残りの三人だ。

実際に邪神シェルノートの分体と戦ったスレイはともかく、その恩恵を受けただけで戦いの経験を積むことなく急激なレベルアップを果たした三人は、今のままでは自らの力を使いこなせない恐れがある。そのまま迷宮探索に臨めば、力に振り回されて自滅する可能性すらある危険な状態であった。

高レベル探索者と低レベル探索者でパーティを組むとこのような事態が時々生じるが、そうなった場合、時間をかけて円形闘技場などで新しい力を慣らしていくのが通常である。

もちろんアッシュ達もその慣例に倣い、円形闘技場で模擬戦闘をしていた。そんな中でアッシュが、クラスアップを果たした双子の妹であるルルナに負けて落ち込むなどという一幕もあった。

その際にルルナが見せた新特性魔闘術は、スレイの闘気術と魔力操作の併用に似ている。しかしスレイの生来のセンスに任せた強引なそれとは違い、この特性は過去の闘士系探索者達の努力と経験の積み重ねによって、より洗練され完成された技術体系であった。

無論、使用者であるルルナが熟練すればの話だ。

現在のルルナでは、せいぜい両手両足のガントレットや靴の外部に魔力を物質化した装甲を纏うのが限界であった。これが上級職の魔闘術の使い手ならば全身と全ての装備を魔力の装甲で覆うことも可能らしい。

尤も、こうした特性は闘士系の職業であっても習得できる者が限られている稀少な特性らしいので、そのような者は滅多にいないという。

アッシュ、ルルナ、エミリアの三人はなんとか自分達の力を使いこなそうと、円形闘技場での模擬戦闘や鍛錬を繰り返していたのだが、なかなかそれが捗らない。

スレイとしては自分に原因がある以上、この問題については最後まで面倒を見るつもりではあった。しかし流石にいつまでも悠長に付き合ってはいられなかった。スレイ自身もあと少しでクラスアップ可能なレベルに至るという状態なのだ。

そこで三人と臨時に短期のパーティを組み、自らもレベルアップを図りつつ、実戦の中で三人に力を使いこなせる様になってもらおうと考えた。それ故の今回の迷宮探索である。

中級者用の迷宮を選んだのは、初級者用の迷宮ではこれ以上経験値を稼ぐことがままならないだろうと考えての判断である。ルルナ以外は皆下級職ということもあり、より効率的に実戦経験も積めるはずだ。

その試みはこれまでのところ成功し、スレイも目的のレベルアップまでかなり近付いて

いた。三人も順調に自らの力を把握し、使いこなせるようになってきている。
今もまた、モンスターとの戦闘中であった。
三人の戦いをしっかりと把握し見守りながらも、スレイは自身の戦闘をこなす。
スレイに襲い掛かるのは、人間の女性の上半身と蛇の下半身を持ったB級モンスター、ラミアの群れだ。
スレイは右手の紅刀アスラで容赦なく敵を斬りつけ、一体のラミアを上半身と下半身へと分割する。
更に後ろから迫る別のラミアによる下半身の鞭のようにしなった一撃を、天井ギリギリの高さまで跳び上がって回避する。
この迷宮は、明らかに地中の土を無造作に掘られただけの洞穴で、地面は踏み硬められてはいるがそれでも感触は柔らかい。天井や壁に至っては軽く蹴るだけで足が埋もれ、土が崩れてきそうな脆さだが、空中でしなやかに身体の向きを変えたスレイは、天井を土の下級魔法で強化し足場を硬めて、思いっ切り蹴りつける。
閃光の如くラミアの眼前に降下したスレイは、アスラでラミアの頭頂部から蛇の下半身の一部までを縦に真っ二つに斬り裂く。
同時に横合いから迫っていたまた別のラミアの腰を、左手の蒼刀マーナで斬り裂き上下

真っ二つに断ち切る。
容赦のない攻勢でラミアの群れを怒涛の如く斬り裂いていくが、スレイの手はちっとも抵抗を感じない。武器が強すぎるのだ。
ラミアの防御力もそれなりのはずだが、そんなものは問題にならないくらいに双刀の性能が優れていた。
やはりシークレットウェポンの双刀は、こんな相手に使う物ではないと考え、途中から二本の鋼鉄のロングソードに持ち替え、群れの残りを狩っていく。
刀とは違うロングソードの扱いには若干の違和感を覚えるが、それでも特性で上昇した剣技と闘気術と魔力操作の併用による強化を加えれば、この程度の相手なら何の問題もない。
自分に向かって来ていたラミアの群れを全て狩り終えると、剣についた血糊を振り払い、鞘に納める。
アッシュ達もまた、巧みに連携した戦いを見せ、自分達に襲い掛かって来ていたラミアを倒し終えていた。
やはり魔闘術を習得したルルナの活躍が、終始特に目立っていた印象を覚える。
「大丈夫だったか、ルルナ、エミリア？　怪我などは無いか？」

「おいおい、俺のことは無視かよ？」

ルルナとエミリアに掛けられた心配の声に、無視された形のアッシュが文句を言う。

「心配するまでもなく、男なら自分でどうにかするのは当然だろう。それに自分の女を心配して何が悪い？」

ふざけ半分の掛け合いではあるが、スレイの自分の女発言に、ルルナとエミリアは羞恥に頬を赤く染める。

そんな二人に軽く笑い、スレイはすぐにカードを確認したが、経験値が5しか得られておらず、次のレベルまではまだ15必要だった。

スレイが倒した群れとアッシュ達が倒した群れ、計算するとラミア三体につき経験値は僅か1の計算だ。

経験値を四人で共有しているとはいえ、まったく話にならない効率の悪さである。

だが、あと少しでクラスアップが可能になることに加え、この迷宮の最下層、地下二十五階にはA級ボスモンスターがいるという話なので、このまま最後まで突き進むことにする。

何より、アッシュ達三人の戦闘を見る限りは、彼らにはまだこの程度の迷宮が妥当であると思えた。

そもそもレベルというものは、高くなればなるほど、次のレベルに上がるまでに必要な経験値の幅が長くなっていく。経験値を稼ぐ効率が悪くなるのも当然のことなのだ。

その点、非常識な存在のスレイが共に居たことで、アッシュ達三人も異常な効率でレベルアップしたと言える。

限界レベルは個人によって決まっており、そこに達すれば、モンスターを倒しても入手できる経験値は0になる、つまりレベルアップできなくなるという話も聞いている。

そのような状況と比べれば、今の成長速度でも遥かにマシだろう。

神々が創り上げた迷宮システム、人間などのか弱い種族を強くする為のシステムの中でさえ限界は存在し、レベル90台に辿り着けるのは、本当に選ばれた者達だけなのだ。

更にレベル99となり、勇者の称号を得るところまで到達できるのはその中でもほんのごく一部。

その勇者となれる者とてレベル99が限界なのだから、レベルが20台でありながらランクがA級相当に上がった自分にはまだまだ可能性があるのだと考えることにする。

ただやはり、スレイは今の敵の強さが物足りなく感じていた。中級職にクラスアップしたら、次はソロで上級者用の迷宮に潜るべきかと考える。

その為にもまずはレベル25を目指すことにする。

この階層にはもう敵の気配を感じない。

再びモンスターが出現し戦闘が発生するまでに時間がかかりそうな為、軽く物思いに耽(ふけ)っていたスレイだったが、次の階層への階段を見つけると三人に声を掛け、新たな階層へと下りて行くのだった。

毒蛇の巣穴――地下二十五階（最下層）『大蛇の間』最奥の広間

スレイ　Lv：25　Age：18

【筋力】B　【体力】B
【魔力】B　【敏捷】SS
【器用】S　【精神】EX
【運勢】G

【称号】不死殺し（アンデッド・キラー）、神殺し（ゴッド・スレイヤー）

【特性】天才、闘気術、魔力操作、闘気と魔力の融合、思考加速、思考分割、剣技上昇、炎の精霊王の加護、炎耐性、毒耐性、邪耐性、神耐性

【祝福】無し

【職業】剣士

【装備】紅刀アスラ、蒼刀マーナ、鋼鉄のロングソード×2、革のジャケット、革のズボン、革の靴

【経験値】2402　次のLvまで98

【預金】10,100コメル

ルルナ　Lv：25　Age：18

【筋力】B　【体力】B
【魔力】D　【敏捷】B
【器用】C　【精神】C
【運勢】D

【称号】纏う者、エルシア学園卒業生

【特性】闘気術、魔闘術、格闘技上昇、炎耐性、毒耐性

【祝福】闘神バルス

【職業】魔闘士

【装備】ダマスカスのガントレット、ダマスカスのブレストプレート、絹の服、絹のズボン、革の靴

【経験値】2487　次のLvまで13

【預金】14,820コメル

アッシュ　Lv：25　Age：18

【筋力】B　【体力】B
【魔力】E　【敏捷】C
【器用】D　【精神】C
【運勢】C

【称号】見習いバーサーカー、エルシア学園卒業生

【特性】狂化、戦技上昇、炎耐性、毒耐性

【祝福】戦神アレス

【職業】戦士

【装備】ダマスカスのバルディッシュ、ダマスカスのプレートメイル、重量軽減のアミュレット

【経験値】2496　次のLvまで4

【預金】104,000コメル

ここまでの道程で、スレイはとりあえずの目的であるレベル25に到達してクラスアップの条件を満たし、アッシュ達三人も自分の力を実戦の中で把握して殆ど使いこなせるようになっていた。

現在スレイ達が居るのは最下層『大蛇の間』、最奥の広間の手前である。

ここにはA級ボスモンスター、ジャイアント・ワームが出るはずだ。

今回の目的は全て果たしたとはいえ、わざわざここまで来たのに何もせずに帰るのもどうかと思える。

アッシュ達三人の現在の能力も考え、スレイはジャイアント・ワームと戦うことを決めた。

「アッシュ、ルルナ、エミリア。まだ余力はあるか？　もし無いなら俺一人で戦おうと思うんだが」

「何言ってやがる、まだ全然余裕だぜ」

「わたくしもまだまだやれますわ」

「見縊らないで下さい、まだ行けます」

三人の威勢の良い返事を聞き苦笑すると、スレイは皆に回復薬や魔力回復薬などを使わせて万全の状態を作らせる。

そして全快した三人を伴い、そのまま最奥の広間へと踏み込んで行った。

「ほう」

エミリア　Lv：25　Age：18

【筋力】D　【体力】D
【魔力】A　【敏捷】D
【器用】C　【精神】B
【運勢】C

【称号】森エルフ、エルシア学園卒業生

【特性】魔力操作、思考加速、思考分割、魔法上昇、精霊の祝福、炎耐性、毒耐性

【祝福】森神ルディア

【職業】魔術師

【装備】祝福の杖、エルフのローブ、エルフの靴

【経験値】2467　次のLvまで33

【預金】15,310コメル

「でけぇ」
「大きいですわ」
「大きすぎます」
それは大きかった、あまりにも巨大であった。
目の前のジャイアント・ワームは胴体の直径が十メートル程はあるだろうか。全長は地面に潜っている部分もあるから正確には分からない。しかし長さだけなら、かつて見た竜化したときのイリナより上かも知れない。地上に出ている部分だけで少なくとも二十メートルはあるだろう。
通常のジャイアント・ワームの規格を遥かに超えている。その巨大さは強いインパクトを持ってスレイ達の脳裏に刻まれた。
頭部だけはドラゴンのそれだが、脚を持たず、ただ地面から生えているその姿は巨大なミミズのようにも見える。
だがワームとは本来、大蛇を表す言葉だ。
この最下層に潜んでいたA級ボスモンスター、ジャイアント・ワームの名は、そういった意味では正しいということになるのだろう。
初級者用や中級者用の迷宮のボスモンスターは世界に唯一の存在では無い。普通のモン

スターより強いとはいえ、世界中を探せば何体も存在しているモンスターである。その為倒された後の補充として、魔法陣で毎回新しく召喚されているのだ。
同じ種類のモンスターであっても、探索者に倒された後に召喚される個体は当然、以前の個体とは別の個体である。
となれば、この巨大さは恐らく自分の運勢：Gが原因で引き当てたのだろうと、スレイは予測を付ける。
だが、どんな敵であろうがスレイのやることに変わりは無い。
ただ敵を倒す、それだけのことである。
スレイはジャイアント・ワームが動きだすその前にアスラとマーナを引き抜き、シェルノートの分体戦後、発動が一瞬でできるようになった闘気術と魔力操作の併用で、瞬時にトップスピードに乗る。
残像すらも残さず、コマ落としの映像のように一瞬で、亜光速で敵を攻撃範囲に捉える位置に移動する。
静止する直前に魔力操作を解くことで亜光速のままに空気抵抗を受けるが、闘気術で強化した肉体で何とかその衝撃に耐え、反動で空間を歪めて衝撃波をジャイアント・ワームに叩きつける。

地表に露出している部分がズタボロになり、苦痛に蠢き、甲高い鳴き声を上げるジャイアント・ワーム。

敵の頭が未だ高い位置にある為、スレイは再び闘気術と魔力操作を併用し、僅かな影さえも残さず跳び上がる。

瞬く間に敵の頭の高さに、まるで瞬間移動したかのように出現する。双刀の刀身のみ魔力操作を解除し、刀を振るった空間を歪める程の衝撃波で以て、敵のその巨大な直径すらも無視し、頭から身体までバラバラに斬り裂いていく。

だが、敵の体液を僅かに浴びた服の一部が溶け煙を上げるのを見ると、今度は先程とは真逆のコマ落としのように、その立ち位置を一瞬で、ジャイアント・ワームの体液を浴びない位置まで後退させる。

あまりの展開の速さにアッシュ達三人は半ば呆然としていた。しかし見るも無惨な有様に成り果てたジャイアント・ワームを見て気を取り直すと、アッシュがスレイに呆れ混じりの称賛の声を掛ける。

「なに一人であっさり倒しちまってるんだよ、この！　本気で半端ねぇなスレイは。あの巨体を瞬殺かよ!?」

ジャイアント・ワームのドラゴンのような頭部はもはや存在せず、ミミズのように見え

たその巨大な身体も、地面から十メートル程出ている部分を残すのみだ。残りの半分はスレイによってバラバラに斬り裂かれ、ただの肉片と化していた。

この場の誰もがこれで終わりかと思ったそのとき、残った半分の胴体の斬り裂かれた切り口が突然蠢き始める。かと思うと、体液を撒き散らしながら、一瞬にして頭部と残り十メートル程の身体が再生していた。

「ほう」

「なっ!?」

「嘘っ」

「そんなっ」

信じがたい再生力である。というよりも、こんな再生力を持つジャイアント・ワームなど四人は聞いたこともない。

こちらに襲い掛かってこようとするジャイアント・ワームを、スレイの雷撃の魔法とエミリアの水の魔法で牽制する。

スレイは刀で倒す力押しの方法も幾つか思いつくが、ここは丁度良いので、炎の精霊王の加護の力を試してみようと炎の魔法で敵を焼き尽くすことにする。

アッシュ達に秘密の一端を見られることになるが、この三人なら問題無いだろうとスレ

イは判断した。

とりあえずは様子見に、炎の下級魔法を使ってみることにして、思考加速と思考分割により高速で魔法の構成を組み立てる。最低限の呪文を唱えると、炎の精霊達が楽しげに親しげに自分に近付いて来るのを感じた。

そうして放った炎の下級魔法は……自分でも信じられない程の業火を生み出していた。圧倒的な熱量、火力、威力。以前自分で使ったことのある炎の中級魔法すらも凌駕していた。それどころかもはや、昔、魔術の師が使ってみせてくれた炎の上級魔法をも軽く超えている。

それでいながら、スレイ達四人は何ら熱さを感じることはなく、広間の中も高温になっている様子は無い。

標的たるジャイアント・ワームのみを、再生する暇さえ与えず焼滅し、地中にある残りの身体までをも焼き尽くすように炎は地面へと潜って行く。

炎が消え去ると、先程までの煉獄の如き光景などどこにも無かったかのように、ジャイアント・ワームのみが消えていた。

地面中央に巨大な穴が開いただけの広間と、ただ唖然とする四人のみが存在している。

ボスモンスター召喚の魔法陣にもまったく影響はなく、周囲の土壁や地面にも何ら変

わった様子は無い。

「性能で言えば非常に使えるんだが別の意味で使えないな。……炎の魔法は暫く控えるか」

そうスレイは独りごち、何やらおねだりをするような雰囲気の炎の精霊達に感謝の念を伝える。

それに満足したように、精霊達は喜びながら去って行った。

スレイは唖然としたまま動けずにいるアッシュ達三人を見る。するとアッシュがいきなりスレイの肩を掴んでガクガクと揺さぶり、怒涛の如くまくし立てて来た。

「お、おい今の何だよ、炎の最上級魔法か何かか？　それにしたってあの威力はちょっと有り得ないだろう⁉」

アッシュのように直接問い質すようなことはしないが、ルルナやエミリアも何やら物言いたげな視線を向けて来る。

「分かった。分かったから、教えるからまずは落ち着け」

スレイはアッシュを宥め、何とか肩から手を離させると、自分でも確認する為に、カードの全能力値を三人に見せる。

スレイ　Lv：26　Age：18

【筋力】B　【体力】B
【魔力】B　【敏捷】SS
【器用】S　【精神】EX
【運勢】G

【称号】不死殺し（アンデッド・キラー）、神殺し（ゴッド・スレイヤー）

【特性】天才、闘気術、魔力操作、闘気と魔力の融合、思考加速、思考分割、剣技上昇、炎の精霊王の加護、炎耐性、毒耐性、邪耐性、神耐性

【祝福】無し

【職業】剣士

【装備】紅刀アスラ、蒼刀マーナ、鋼鉄のロングソード×２、革のジャケット、革のズボン、革の靴

【経験値】2521　次のLvまで79

【預金】10,100コメル

とりあえず、予定より一つ多めにレベルが上がってしまったが、強くなる分には困るものでも無いだろう。クラスアップが少しくらい遅くなったからといってデメリットがある

わけではないし、戦闘経験は間違いなく自らの糧となるからだ。
炎の精霊王の加護についても、その効果を実感することができた。
今はクラスアップの儀式を行い、より強くなることが何より最優先である。一刻も早く迷宮の外に出ようとスレイは考えるのだが、他の三人はそうはいかない。
あまりに非常識なスレイのカードの文言に、三人は思わず問いかける気配を見せる。
その機先を制してスレイは言った。
「すまないが、細かいことは詮索しないで欲しい。俺としても色々とあってな、なるべくなら隠しておきたいものなんだ。お前達なら信用できると思って見せたが、これについては詮索も他言も無用で頼む」
スレイが頭まで下げて真摯に頼むのに、流石にこれ以上追及したり信用を裏切ったりする訳にもいかないと考えた三人は、どこか納得がいかない顔をしながらもそれぞれ頷く。
そして四人は飛翼の首飾りで迷宮を脱出したのだった。

竜皇　〜晃竜帝国〜

青空の下、信じられない程の巨躯を誇る竜が二体飛翔している。
一方はおよそ全長三〇〇メートルというスケール、もう一方は全長一五〇メートル程と半分程度の大きさで、どちらもその身体は漆黒の輝きを誇っていることから親子の関係を連想させる。
両者共に、圧倒的な迫力を感じさせている。膨大で爆発しそうな筋力を秘め、内側から盛り上がるようなガッシリとした巨体である。また、四肢もその巨体を支えるに足る太さを持ち、特に後ろ足の太さは凄まじい。そして四足の全てが五本の鋭く長い爪を備えており、暴虐的な威風を漂わせている。
また僅かに開いた顎は、全開したならばいか程の大きさとなるのか想像もつかない。そこから垣間見える牙は爪の鋭さに勝るとも劣らないもので、その攻撃力は途轍もないものだろう。
その尾も非常に太く長く、振るわれたなら爆発的な威力を発揮するはずだ。更に翼の面

積もかなりの大きさで、その巨体をより大きく見せている。
なんにせよこれだけの威容を持った竜など、そこらの純竜種のモンスターにも存在しない。
古に謳われる、全ての神々を圧倒しこの世界本来の神々を何柱も殺したとまで言われる失われし名持ちの邪龍か、伝説でSS級以上とされる純竜種のモンスター、或いは竜人族の皇族ぐらいのものだろう。
そして全長三〇〇メートル程の竜の背には一人の少女が居た。
腰までの長さの白い髪を靡かせ、赤い瞳を超高速で飛ぶ風圧の中でも閉じることなく見開き、落ち着いた所作で悠然と座っている。
髪の色と瞳の色から分かるように、恐らくはアルビノなのだろう。その肌の色は不自然な程に白いが、強い太陽光にその身を晒してもまったくダメージを受ける様子は無い。
その身に纏っているのは大陸の中央部の国々で流行しているどこか華美な印象のヒラヒラとしたドレスであり、平気で隙間から素肌をのぞかせている。
ごく普通の身長だが、細すぎるようにも感じられる肢体だ。それでいて女性らしい柔らかみが強く感じられる。胸は標準的な大きさだが、スタイルは抜群と言えるだろう。またその顔立ちは彫りが深く、目は大きく丸めでその赤い瞳には優しい光を宿している。その

表情は笑みを湛え、どこか深い優しさや、慈愛が感じられるような気さえする。
ふと、もう一体の竜が地上を見やる。
次の瞬間には、その竜は地上へ向かって直滑降を開始していた。
その速度は今までの悠然とした飛翔とは明らかに違う。通常の物理的な落下速度さえ遥かに超えた不自然なまでの速さで、その姿はすぐに見えなくなる。
少女を乗せた方の竜は慌ててその場でターンし、もう一体の竜が直滑降した辺りの上空を旋回して地上の様子を窺う。
その目は我が子を心配する親そのもので、同じくその竜の背に乗った少女も気遣わしげな視線を地上に向けている。
そしてその親らしき竜は、背中の娘になるべく負担をかけない様にする為であろう、ゆっくりと旋回しながら地上へと降下して行った。

金属音が響き渡る。
襲い掛かる野盗に探索者達が立ち向かい、武器で打ち合う音だ。
近くにはなかなかに豪華な馬車があり、馬車内では一組の夫婦とその娘が震えながら抱き合っていた。

馬車の豪華さに比例して裕福そうな身なりの一家である。野盗と対峙する探索者達は恐らく、彼らが雇った護衛だろう。

探索者ギルドの支部は大陸各地や島国ディラクにもあり、探索者の一部は迷宮都市アルデリアから出て大陸各地を冒険することもある。新しい物や稀少な物の発見を目指したり、或いは船で外洋に漕ぎ出し、このセレディア大陸以外にも存在すると言われる新大陸の発見を目指したり、大陸各地に点在する誰が創ったのか分からない迷宮に挑んだり、或いは支部を通じて探索者の力を必要とする様々な依頼を受けたりもしているのだ。

無論神々の創った高度な魔導科学によるシステムは迷宮都市にしか存在しない為、最初の登録と肉体改造は迷宮都市の探索者ギルドで行い、クラスアップに関しても迷宮都市の職業神の神殿で行う必要がある。

だが探索者になってすぐに迷宮都市を出て、大陸各地での自由な冒険や製作者不詳の迷宮探索、支部を通じての依頼への対応に従事する者はかなり多い。

探索者になるということは最も手っ取り早く強くなる手段でもあり、その目的の為だけにシステムを利用する者もいるのだ。

尤も、迷宮都市の迷宮はそんな探索者達を更に効率良く成長させる為に神々によって創られたものであるので、それ以外の場所でのレベルアップは難易度が高い。

その為に迷宮都市外で活動する探索者は、探索者とは名ばかりでレベル1のまま成長していない者がいたり、逆に迷宮都市で徹底的にレベルを上げて鍛えた後に満を持して迷宮都市の外に出る者がいたり、或いは探索者の力を悪用して野盗と化す者がいたりと、実に玉石混交である。

今回馬車に襲い掛かる野盗達も、レベルこそ低いと察せられるものの元探索者らしい。しかも圧倒的多数である為、いくらそれなりに優秀な探索者達であっても、敗北はもはや時間の問題ではないかと思われた。

護衛の切り札であった虎の子の魔術師も、もはや魔力を使い果たし戦力外となって、雇い主一家と共に馬車の中で座りこんでいる。

そんな窮地の中、上空から突然力強い声が降って来る。

「そこな悪党共！　待つがいい‼」

あまりにも突飛な事態に、天を振り仰いだ探索者と野盗一同は、最初は幻を見ているのかと眼を疑った。

何もない空から少女が落ちて来ているのだ。

それも信じられないような高さの上空から。

そしてみるみる間に少女は地上へ近づくと、身体をしなやかに捻り回転させ、見事なま

での着地を決める。
大きな衝撃音が鳴り響き、少女の足は地に深くめり込んでいた。
しかし少女は何ら痛痒を感じた様子も見せず、両足を力強く順々に引き抜くと、そのまま大きな胸を強く張って仁王立ちする。
少女の服装は大陸西の大国、竜人族の国である晃竜帝国独特の様式の武術着で、手首までの長袖かつ足首までのパンツルックによってほとんど肌は隠されていた。とはいえ、全身にぴったりと張り付くように密着した衣装である為、女性らしくもしなやかさで強靭な身体のラインがはっきりと浮き出ている。同時に胸の大きさがかなり強調されていた。
呆然と立ち尽くす一同の見守る中、少女は右手人差指で勢い良く野盗達を指さす。左肩を引き、左拳を腰に構え、両足を広げ、大仰な、それでいて勇ましいポーズをとる。
「お前達！　恥を知れ！　お前達の悪行、まさに厚顔無恥にして悪逆非道！　今ここにオレがある限り、もはやお前達の悪しき欲望が叶うことはない！　我が右手は天意‼　我が左手は正義‼　疾風怒濤、断固征伐！　もはやお前達の未来は定まったと知るがよい‼　勧善懲悪！　悪・即・斬！　正義執行！　お前達に待つのは死の安寧か、豚箱行きの未来のみだ‼」
呆然としていた野盗達も、少女の自分達に対する暴言に反応し始める。彼らはまず少女

の容姿が気に入ったようだった。
見事なまでに煌く腰程までもある長く深い色合いの漆黒の髪。大きく切れ長の目に意志の強さを宿し、輝きを放つような漆黒の瞳。その鋭い顔立ちは圧倒的なまでに美しかった。
強さと美が少女の形をとったとしたら、このようになるのではないかと思わせる。
そのことに気付いた野盗達は、男の欲望を滾らせ、性欲に満ちた視線を少女に向ける。
「へっ、わけのわからん頭のイカれた嬢ちゃんだが、大したイイ女じゃねぇか。どんな手品を使って空から降って来たかは知らんが、どうせ魔法の類だろう？　これ程人数差のある敵を相手にどうするってんだ？　嬢ちゃんこそ、未来は決まったな。俺たちに散々弄ばれた挙げ句、奴隷商人に売り飛ばされるって未来がな！」
「お頭、いずれ商品にする女に手を出しちまってもいいんで？」
「おう！　流石にこんだけ虚仮にされたら、俺たち自身の手で徹底的に犯ってやらんと気が済まん！　行くぞお前達！」
野盗達が自分に対し性的な欲望に染まった目付きを向けてくるのを見ると、少女は薄汚いゴミを見る目で続けた。
「度し難いまでの無知蒙昧！　断固愚劣！　その下らん欲望は、オレがこの手で、今ここで打ち砕いてやろう！　おい、そこのお前達、邪魔だからどいていろ」

そう言い放って護衛の探索者達の前に出る少女。
流石に止めようとした探索者もいたが、少女に軽く押されただけで、圧倒的な力によってそのまま倒されてしまい呆然とする。
そして荒唐無稽な活劇が始まった。
少女の拳が当たっただけで数十メートルは吹き飛ばされ、少女に地面に叩き付けられれば何十センチも地面にめり込み、軽く手を伸ばして少女に触れただけで腕が折れ曲がる。
あまりにも一方的な蹂躙であった。
そして十分も経たない内に、百人近くいた野盗は全員戦闘不能に追い込まれた。再起不能に見える者もいる。
あまりのことに唖然とする馬車の主一家と護衛の探索者達。

そんな中、まるで追い討ちをかけるかのように、上空からとんでもないものがゆっくりと降下して来た。
三〇〇メートル近い巨躯を誇る漆黒の竜、その背中には少女を乗せている。
翼がはばたいてもそよ風すら起こらないのは、おそらく竜気で抑えている為であろう。
馬車の主一家と護衛の探索者達は腰を抜かしその場にへたり込む。竜はそのまま少し離

立ち読みサンプル
はここまで

れたところに、人々を巻き添えにしないように着陸した。
これもまた竜気の効果だろう。それだけの巨体でありながら、着地の衝撃が生じない。
その背中から少女が軽やかに下りてくる。高さなど問題にしていない。
少女が降りた途端に竜は光り輝き姿を変えていく。巨大な竜から通常の人間のサイズへ縮まり、そして壮年で威厳ある黒髪黒瞳の男性の姿へと変わった。
竜人族の変化の常である異空間を利用した着装が行われたのであろう。衣服は纏った状態のままだ。野盗達相手に暴れた少女と同様に衣服は晃竜帝国様式だが、少女のものとは違い、かなり豪奢なものだった。独特の刺繍が施され高貴さを感じさせている。動き易さも重視しているのか、戦闘服としても上等なものだった。
ちなみに、竜の背中から降りたアルビノと思しき少女一人だけがドレスを着ているのは、彼女の好みであり、数少ない我侭としてわざわざ異国から取り寄せているからだ。
威厳を纏った長身の男性は、壮年らしき外見とはいえ若い部類の三十代くらいの年齢に見える。動きはゆったりとして落ち着いて見えるが、それが錯覚であるかのように、周囲の人間が気付かぬ内に、いつの間にか先に暴れた黒髪黒瞳の少女へと向き直っていた。その瞳は鋭い威圧感と力強い包容力とを感じさせる。
男性は少女に対し苦言を呈する。